

だんだんやらなくなっていた。

再開のきっかけは、2009年、東京に転勤してきたことだ。公園で飛ばしている人たちがいることを知り、ネットで検索して参加した。「仲間がたくさんいて教えてもらえるし、切磋琢磨もできます」。今は、仕事以外のほとんどの時間を紙飛行機に費やすほどだ。

会の主な活動は、中央広場で開催する毎月の定例競技会。必要なのは毎回100円、全国大会（二宮杯）の予選会があるときだけ400円の参加費。葛飾区に届け出が必要なので、会員規約は一応作ったが、会員リストがあるわけでもない。参加も退会も自由だ。競技会にも来たい人が来る。

初めて参加した人がいきなり飛



ゴムで飛ばすゴムカタバルト部門



手投げ部門で勝負

行機的设计と手作りをするのは難しいので、最初はメーカーのキットを買って始める。慣れてきたら、先輩が作って飛ばしている自由機の型紙のプリントをもらって自作しながら、少しずつレベルアップしていく。

分らない人には皆が教えるし、自分で作った飛行機の型紙も惜しげもなく提供する。紙飛行機愛好家は教えることに抵抗がないのだそう。逆に、教えたいという思いが強く、自慢の機体のデータや型紙などをホームページで公開する人もいる。自分はこんなすごいものを作った、だから、真似してほしいと自慢したいのだという。取材した日は、自由設計機（自分で自由にデザインした飛行機）とジェット機、先尾翼機によるト



競技会には機体をいくつも持参する

ーナメントが開催されていた。ほとんどの機種は飛ばすのにゴムバンドを使うが、自由設計機には手投げ部門もある。富山さんは手投げ専門だ。手のほうが投げたという感覚と爽快感を味わえるらしい。

競技種目はこれだけではない。折り紙機、ホッチキス機（ホッチキスで留めて作る）、複葉機、双胴機、ゼロ戦など、実に多彩。紙だけでなく、バルサという木の飛行機もある。自由機の競技は毎回欠かさず行い、それ以外は異なった機種を選んで開催している。

競うのは滞空時間だ。数回飛ばして、滞空時間の合計の多い人が優勝となる。ただし、どんなに飛んでも1回60秒がマックス。60秒以上飛んだ場合は、自力でなく上昇気流に乗ったということ。紙飛行



最後に参加者全員で記念写真

機は上昇気流に乗って視界から消えていくことがよくある。それを「視界没」と呼ぶ。この日も行方不明になった機体がいくつかあった。

紙飛行機は大人の遊び

紙飛行機は作っている時間がまた楽しい。自分でデザインしたオリジナル機体を何度も調整して、会心の作を作っていく。それが思うように飛び、ほかの人から評価されたときの喜びは格別だ。

人と違うもの、誰も飛ばしていないようなものを作ることもある。山田さんが見せてくれたのはテントウムシ型。「円盤を飛ばしたかったんです。完成に1年かかって、何十機つくったことか」と満足そう。自由機はどんな形でもいいのだ。どんどん作っていくから、所有



山田さんのテントウムシとホッチキス飛行機